さざなみ国語教室
第498号　2023年9月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

小野市立小野東小学校　創立５０周年運動会
５・６年集団行動　スピーチ
「当たり前のありがたさ」
児童会長　井上　温喜（はるき）

ぼくは、この運動会を通して、学んだことが二つあります。

一つ目は、学校訓「ひとりで、みんなで、さらにチャレンジ」の意味です。

まず、「自分が」がんばらないと何も始まらないということです。まずは自分が「集団行動を絶対に成功させる」という気持ちをもたないと、技は絶対に成功しません。

きっとこの先も、まずは自分が変わらないといけないと思うことで道は開かれていくと思います。そして、「友達」と団結することです。集団行動の練習の中で、なかなかうまくいかなかったときがありました。でもみんなが同じ気持ちをもって、同じ目標に向かってがんばり続けることで、完成度はどんどん高まりました。集団行動は、全員の成長があるからできるものであり、団結してできる素晴らしさを感じました。

二つ目は、「当たり前に感じていたことへの感謝の気持ち」です。ぼくは、小野東小学校に通えているや、運動会などの学校行事ができていることにすごく感謝しています。

なぜかというと、ぼくが３年生のころは、コロナウイルスで、学校に行けなかったり、運動会などの学校行事ができなかったりしたときがあったからです。

今、ぼくは、最高学年で、こうやって運動会までできていることに本当に感謝しています。

あって当たり前だった運動会は、当たり前ではありません。家族がいてくれること、友だちと遊べること、学校で学べること、命があること、これまで当たり前に思っていた今の生活も、けっして当たり前ではないということに気付きました。だからこそ、感謝の思いを忘れず、これからも自分達にできることを精一杯していきたいと思います。

最後に、小野東小学校は、今年で創立５０周年を迎えます。こんな素晴らしい学校に通えていることに幸せを感じます。５０年間支えてくださった先輩方や、これからこの学校を支えていく後輩たちのためにも、５０年で一番の最強学年になります。そして、卒業していくときには、この思いを５年生にたくします！

今日は、本当にありがとうございました！

運動会の最終プログラム・集団行動「リーダーへの道」最後の場面で、高学年を代表する児童会長のことばです。

さざなみ

▼日々、「よい授業」を目指して工夫をしています。しかし、良いかどうかを見極めるものが少なく迷うことがあります。授業成果はテストという評価方法があります。読書をする、丁寧な言葉遣いに心掛ける等もあります。その成果が、目に見える形で表れてほしいと思っています▼かつて、落とし物がかなり多かった時がありました。鉛筆や消しゴム等です。加えて、忘れ物も多かったのです。ところが、ある年、「忘れ物ゼロ」の日が数か月続いていることに気が付いたことがありました。▼その年は、とりたてて、落しもの・忘れ物をしないという指導をした記憶はありません。ですから、「気がついた時」ということになるのです。心当たりがあるとすれば、「授業の終わり」に余裕を持たせることでした。授業終了時には、ノート・教科書・筆箱を整え机の中に入れること、机と椅子を整えて休み時間を迎えることが全校の約束の内容でした▼結果として休み時間を待ちかねて、運動場へ飛び出す子が少なくなりました。廊下をバタバタと走って通り過ぎる子も見かけなくなりました。授業と休み時間の切り替えが上手にできるようになったからです▼授業の終了時を見通すには指導に工夫が必要です。授業に対する子どもの満足度も求められます。勿論、指示を聞き取る力も必要です。「良い授業」は生きる力を育てるのです。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

『漢字検定』の取組

井上　滉斗

日栄小学校では、今も昔も、基礎的・基本的な知識および技能の習得の差が大きいという課題がある。そのため、学力向上の一貫として、十年以上前から、『漢字検定』の取組が始まった。

漢字検定では、書き取り問題と読み取り問題を合わせて一〇〇問出題する。九〇点以上が合格となり、再テストも行う。採点の時には「とめ・はね・はらい」まで、厳しく採点する。

漢字検定のプレテスト（本番一週前の確認テスト）を採点して、返却した時、子どもたちと本番の目標について話し合った。そして、個人の目標を立てる前に、クラスの目標を立てた。みんなで話し合った結果、クラスの目標は、

『みんな合わせて、一八〇〇点』

となった。これは一人あたり九〇点とらないと達成できないため、大きな目標である。

その後すぐに、個人目標を考えた。

「九〇点以上取って、クラスも自分も合格する。」

「プレテストよりも十点あげる。」

「とめ・はね・はらいを意識して、おしい間違いをしない」

など、自然とクラスの目標を意識しながら、自分の目標を考えていてうれしい気持ちになった。

クラスの目標を決めてからは、休み時間に自主学習に励む姿が多く見られた。友だち同士で練習しながら、間違いを指摘し合い、互いに高め合う姿が見られた。また、家族の力を借りて、自主学習ノートにびっちり練習している子も何人もいた。

そして、漢字検定本番を迎えた。

どの子も自分の力を出し切って、テスト中も子どもたちの緊張感がとても伝わってきた。

わたしもドキドキしながら一人ひとり、丁寧に採点を行った。

結果として、二十人全員がプレテストから点数が上がっていた。そして、みんなの合計は、一八四八点で、クラス目標を達成することができた。

このことを、子どもたちにも伝えると、自然と立ち上がって、みんなで大きな声で喜びを分かち合った。なんと、一番伸びた子はプレテストから、五七点伸びていた。みんなで達成できたことが宝物となったように思う。

二学期の漢字検定も、クラスみんなで取り組み、成長も喜びも分かち合えるように、声かけをしていきたい。

（豊郷町立日栄小学校）

夏休みの出会い

畑中　翔太

夏休み期間中の話です。２学期が目前となり、私はＡちゃんが新学期に登校できるか気になっていました。Ａちゃんは夏休み学童に通うことが多かったので、私は学童にＡちゃんの様子を見に行きました。久しぶりにＡちゃんに出会ったときに、

「畑中先生。久しぶり。」

と笑顔で声をかけてくれました。私は少し安心して、何をして遊んでいたのか聞くと、

「ブロックでお家をつくっていたの。」

と言って、ブロックを繋げて作った大きな箱や犬を見せてくれました。

「はい。これは本だよ。」

と二つの薄いブロックを直角につなぎ合わせた本をもらいました。自分の好きな世界観をのびのびと広げながら物づくりを進めている姿を見て１年生の素直さを再確認しました。

私はその本を読む真似をしながら、

「昔々あるところにＡちゃんという子がいました。Ａちゃんは・・・・。」

とお話をつくって言いました。Ａちゃんはくすくす笑っていました。すると近くにいたＢくんが笑顔で近寄りながら

「違うよ違うよ。その本貸して。ぼくがお話を読んであげるから。」

とブロックの本を取って、自分が作ったお話を話し始めました。

２年生の担任をしていた時に「お話を作ろう」という単元がありましたが、その時のことを思い出しても、何の絵も文字もないブロックを見ながら自分でお話を考えていることに面白さを感じました。簡単で短いお話を考えて発表をすることができるブロックの本を教室でも試してみたくなりました。

夏休みが終わりＡちゃんは笑顔で登校することができました。２学期初日に学級通信のタイトルを学級で「いい考えがある人は教えてくださいね」と募集しました。予め考えていたのですが、子ども達にも通信に関わってほしいと思ったからです。５分休憩にＡちゃんが来て

「おおつっこがいいと思う。」

と話しかけてくれました。自分の考えを伝えに来てくれて、通信に関わろうとしてくれて嬉しかったです。これからも学級通信を通してＡちゃんと関わっていこうと思いました。

（大津市立田上小学校）

常識を超える

川端　由起

11月に算数の研究授業を行うことになりました。志津小学校の代表として、滋賀大学の教授の先生と、全職員が見に来る授業になるので、丁寧にお断りしたのですが、他に手を挙げる人がいなく、私が行います。若手の方が積極的に手を挙げないのは寂しいです。さすがに私は恥をかけないと思い、最近の算数の研究本を見に行こうと思い、本屋に行きました。そこで、国語授業の「常識を歌え！」という本が目に留まり、思わず購入しました。

今までの常識とは、「漢字５０問テストは問題を子どもたちに配り、練習させてから行うものだ」だそうです。私は、長年そうさせていました。なぜなら、評価の時に、平均点が低ければ、成績に影響するのと、下位の子への配慮です。抜き打ちでテストを実施すれば、平均点はかなり低くなり、漢字が出来ない児童は落ち込むばかりです。しかし、漢字を練習してからの従来の方法は、一定の成果はあるが、一定止まりであると、筆者は警告します。

また、教科書教材において「初発の感想を書かせて終わり」は従来の常識であるが、本当にそれでいいのかとも警告しています。「私なら初発は文の要点を書かせる」と筆者が言っているので、私は「どうぶつえんのじゅうい」で初めて、初発の授業において文の感想を書かせるのではなく、文の要点をまとめさせました。昨年の初発の授業の感想は、「どうぶつえんのじゅういさんは、色々な、どうぶつを見て回って、帰る時にしょうどくをする。だから大変な仕事だと思いました。」と書いている児童が多かったのですが、今回は、「朝、お昼前、お昼すぎに、夕方と仕事があります。一日のしごとのおわりには、きょうあったできごとや、どうぶつを見て気がついたことを日記に書きます。」と書いた児童が何人もいました。

もうここで、説明文の中の具体例の特徴を児童は気づいているのです。「初めてこの文を読んだ感想を書きましょう。」ではなく、「この文を初めて読んで、話のないようをまとめてみよう。」と問いを変えるだけで、これだけ違うのかと驚かせられました。

物語文においては、あらすじを書かせることで、さらに一人一人の読みが顕著に表れるのではないかと思いました。

教育界での常識、勤務校での常識、常識は先人が培ってきたもので、長所も多いと思います。ただ、常に目の前の子どものこと、子どもが伸びゆく先のことを考えて日々実践していくことが必要だとこの本を手に取って実感しました。

（草津市立志津小学校）

全国国語実践研究会東京大会

川部　長人

八月に全国国語実践研究大会に参加した。今回は『深い学びにつながる確かな国語力の育成を目指して―第二学年『名前を見てちょうだい』の実践を通して―』というテーマで発表を行った。今回、「確かな国語力の育成」とテーマに設定したが、低学年期の「確かな国語力」の育成のためには、特に音読と視写の指導が大切である。文章を読んでいるときにつまったり、正しく読めていない状態だと、十分に内容理解ができている状態ではないと考える。音読でスラスラ読めていることが第一に大切なことである。また、言葉にこだわるということも大切である。特に国語では叙述を基に考えるということが重要である。「この叙述から、こう考えた」と話せる子どもに育てていきたい。そのために、全文視写に取り組んだ。今回は、視写の成果を中心に紹介する。

場面分けの後、場面ごとに視写を行い、場面の様子や声や動きで表したいところについて確認した。視写を行うことによって、子どもたちが場面にこだわって学習しているなと感じたやり取りを紹介する。

Ｔ　えっちゃんは何でこんなに怒ってやるんやろ？
Ｃ１　大男に帽子を食べられたから。
Ｃ２　えっちゃんにとって大切な帽子やったから。
Ｃ３　お母さんがえっちゃんのために作ってくれた大切な帽子を食べられたから怒ってる。
Ｔ　えっちゃんは大男に大切な帽子を食べられたから、こんなに怒ってやるんやな。
Ｃ４　それだけじゃない気がする。
Ｔ　他にもある？
Ｃ５　私は教科書62ページの最後の行の「たべちゃったよ。だから、名前もたべちゃった。」っていうところがすごく気になった。「ぼうしをたべちゃった」だけでもいい気がするのに。
Ｃ６　ほんまや。名前も食べられたからこんなに怒ってるんちゃう。
Ｔ　名前を食べられたらみんなも嫌？
Ｃ７　嫌や。お母さんが大切につけてくれた名前やし。
Ｃ８　名前がなくなったら、自分がなくなる感じがする。
Ｃ９　名前って大切やな。
Ｃ１０　確かにこのお話って名前たくさん出てきたな。「のはらこんきち」とか「はたなかもうこ」とか。
Ｃ１１　名前は一人に一つしかないものやし、命くらい大切やな！
Ｃ１２　名前の大切さがすごいわかった気がする。

視写だけの効果ではないかもしれないが、子どもたちの発言が叙述に基づいて言葉にこだわっているように思えた。

協議会の中でも、視写については時間がかかったり、どこを視写させると効果的など様々な意見をいただいた。今年度の実践では音読と視写を中心に、子どもの変化を考えていきたい。

（東近江市立能登川南小学校）

素朴な疑問・三題

北島　雅晴

今まで、どこの学校・学年でも行われてきたことだが（どうしてだろう？）と、日頃から疑問に思うことを三つ聞いてほしい。

その１　学年会の中身

先日、たまたま更衣室で出会った若手有望株の先生に尋ねてみた。

「もしも、二学期に先生ががんばりたいことは何ですかと聞かれたらなんと答えますか。」

しばらく間があった後、

「自分の考えをもって授業に参加する子になってほしい。」

と答えられた。会話はもう少し続くのだが、先生は算数の授業を想定して話されたようだ。それならば、具体的にどうしたらよいのだろうか、方法（アイデア）はいろいろとある。

一人ひとりの先生が、こういう子どもに育てたい、こんなことをやってみたいという思いを内に秘めているのではないかと感じる。学年・学期はじめの学年会が、「あなたは何をしたいですか。」という話題から始まりそれらを交流したら、前向きで創造的な取り組みができるのではないかと思う。

学期始めに、子どもたちにめあてを考えさせることが多いが、先生が明確なめあてをもっていないのに、休み明けの子どもたちが、はっきりとしためあてをもてるはずがない。

その２　音読の家庭学習

決められた教材を音読して保護者にチェックをしてもらうという家庭学習が一般的になっているが、ほんとうにそれでよいのだろうか。

音読の指導は、本来学校で行うものである。読む時の姿勢、口の開け方、句読点に関する意識等、教師が指導しなければならない事柄が多くある。それを家庭学習に任せてもよいのだろうか。国語の学習の時間に、音読の活動をきちんと位置付ける必要がある。

ただし、音読そのものは重要な学習であり、家庭学習として取り上げてはいけないというわけではない。もしも音読を家庭学習として取り上げるならば、詩・古文・漢文・和歌等、名文を音読・暗誦させる方が、ねうちがあるのではないだろうか。

例えば、百人一首を五十首覚えた、「奥の細道」の始めの部分を暗唱できた、といったことができるようになった方が、より子どもの財産になるのではないだろうか。ただ単に、音読のめあてもなく毎日つづけるならば、ほとんど意義がないと考える。一度子どもたちに、「音読の家庭学習は楽しいですか。」と尋ねてみるとよい。

その３　朱書きの教科書

朱書きの教科書を片手に、授業をされる先生が多い。なぜ子どもと同じ教科書で授業に臨まないのだろうか。

ある時、そのことを指摘したら、「どうして朱書きの教科書ではいけないのですか。」と質問される先生がいた。反論ということではなく、そんなことは考えたこともなかったという様子であった。

それに対してどう答えたかは、覚えていない。

「教師の感覚として、だめなものはだめ。理屈ではない。」という思いはある。昭和の教師の屁理屈であろうか。

だれかが考えた教材分析でなく、子どもと同じ土俵に立って授業・学習に臨みたい。少なくとも、自分自身の教材分析をもとにした授業にしたい。朱書き教科書は、指導の参考にしてもよいかもしれないが、実際の学習に持ちこむべきではない。

教師自らがめあてをもち、それらを教師間で交流し、子どもの伸びと今後の課題を確かめる。教師自身の「主体的・対話的で、深い学び」についても、考えてよいのではないだろうか。

（野洲市立北野小学校）

編集後記

▲第四九七回例会は、第五回全国国語実践研究会に参加する形で実施しました。▲ここ数年はコロナ禍の中で開催が厳しい状況でした。全国の国語教育実践者が集うことの意味・意義を再確認しました。○期日…八月四日、○会場…大東文化会館、○テーマ…主体的・対話的で深い学び、○主な日程…シンポジウム・実践研究発表」でした。▲シンポジウムでは森は、児童書を紹介しつつ「深い学び」について「モヤモヤ」、「ジタバタ」、「納得解」のキーワードで提案し、「納得解」は同時に新たな疑問・課題発見につながる。そうして学びが持続すると主張しました。▲実践研究発表では、川部長人（東近江市能登川南小学校）さんが、「名前を見てちょうだい」（２年）の授業での児童の具体的な変容の記録を通して、子どもの学びを支える授業構想を提案。司会を北川雅士（彦根市立河瀬小学校）さんが担当し、意見交流を通じて深めることができました。また、松澤勇治（元埼玉大学教職大学院特任教授）様からは懇切なご助言を賜りました。感謝申し上げます。▲理事会では「次回の開催地を滋賀県で」との強い願いを受けました。滋賀での大会開催に向けて、さざなみ同人の皆様並びに「近江の国語実践研究会」で学び合う皆様のご支援ご協力を切にお願い申し上げます。▲巻頭には、井上温喜様から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。（森　邦博）